

確かな学びと豊かな心・健やかな体をはぐくむ **学校力向上プラン【学校評価計画書】**

堺市立浜寺小学校
校長 島原 宏文

中学校区におけるめざす子ども像
①学びの基礎をつくり、自分らしい学びを深めることも ②他者と協力し、自他の違いを認め、多様性を尊重することも ③運動する習慣・意欲・能力を高め、運動に親しむことも

令和7度 重点目標
○「いきいきとしている学校『こどもも教職員も』」の具現化に向け、こども一人ひとりをもとより教職員も含めて「居場所と出番」が確保できるように努める。
○知(基礎学力を土台とした学力向上)・徳(学びを支える心)・体(健康維持のため体を動かす喜びの体感)のバランスのとれた質の高い教育を推進する中で、教員の指導力向上をめざす。
○地域をキャンパスとしたり、地域人材を活用したりして、地域共育学校の取り組みを推進し、「地域に生き、やがては地域に貢献できる人」の素地をつくる。

「確かな学び」の現状
●令和6年度の全国学力テストでは、算数の平均正答率が大阪府と同等で国語・理科・わくわくは下回っている。
●どの教科も標準偏差が大きくなり、学力の二極化が見られる。特に中上位層が少ないことが課題である。
●学校へ行くのは楽しいと思っている児童は多いが主体性が高まっている児童とそうでない児童との二極化が見られる。

「豊かな心・健やかな体」の現状
●校舎改修工事の為、環境が整っていない中での体育指導の充実が難しく、運動好きな児童と苦手な児童の二極化が課題である。そのような中、体育授業を充実し体力向上をめざすことが大切となる。
●長時間のスマートフォンやゲームの使用等により、睡眠時間が短くなったり運動不足になったりする児童が見られる。

中項目	具体目標	具体的な取組 (●重点とする取組、★中学校区での取組)	判断基準 (評価のものさし)	評価方法	評価時期	進捗確認 (7月)	達成状況(年度末)		
							自己評価2月	学校関係者評価3月	
確かな学び	学 力 向 上 ・ 授 業 改 善	基礎基本の習得に向け赤ペン先生や地域人材も活用し、学びの土台づくりを行う。 「いきいきと学ぶ子」の育成のため、こどもたちが「知りたい!伝えたい!」と意識が高まるよう授業改善を行う。	○こども自身が具体的なことから問題意識を持ち「いきいきと学ぶ授業」につながるような課題設定について教材研究を深める。	・具体的な課題設定の内容とそれに対するこどもの取組の様子やノート、成果物 ・研究授業時における協議内容	こどもの様子やノート、成果物 本プラン状況確認時	適宜 9・1月	A 子どもにとって身近なこと、自分事として考えられること、子どもが興味を持てること、子どもにとって役に立つことなど、具体的な課題設定ができています。設定しにくい教科や教材について、さらに教材研究が必要。「いきいきと学んでいる姿」「考え抜いている姿」を「強い思いのある目標に向かって、何度も試行錯誤する姿」と整理。2学期末時点でのめざす姿も各学年で設定。研究授業では、当日のこどもの姿の見取りから、討議の柱に沿って研究討議を実施している。	A 研修テーマ「考え抜く」に基づき、強い思いを持たせられるよう課題設定できた。こどもが自ら問題意識を持てるよう、教材の配置や課題設定の仕方を考えられた。研究授業に対してだけでなく、各学年1年間先生方自身が「考え抜いていた」。 こどもが問題意識を持つということや、本当に課題と思って取り組んでいるかなど、課題設定について研究を進めたい。	A 「考え抜く」ことに重点を置いた研究に取り組んだことは評価できるが、その手法や成果を判断するのが難しいと思われた。授業の終わりに「ふりかえり」の時間を設けるなど「考える」「考えさせる」学習が随所にみられ、児童も自然に取り組む様子が窺えた。
		●★こどもの主体性の育成をめざして、こども自身が問い(課題)を設定し、解決する過程で考え抜くことにより思考力を高める。	・月1回、学年の取り組みを振り返って、成果と課題を確認し、研究を積み重ねる。 ・こどもが考え抜く授業実践を週1回以上、行う。	学年の取り組み進捗状況 考え抜いた実践の回数	適宜 9・1月	B 月1回学年取組シートへ成果・課題・取組等入力し、研修部で報告・共有している。「考え抜く」ための「考えたい」「考えてみよう」を大切にしている。今後考えられたか振り返る時間を大切にしていこう。1学期は週に1回考え抜く授業実践に取り組めなかったというクラスもあり、授業公開も意識しながら継続実践する。	A 問題から自分自身でめあてを考えることができる児童が増えた。「考え抜く力の育成」に絶対の答えはないので、先生方が、悩みながらも考え続けていることに価値がある。月に1回、振り返る場があるのでどの学年も一貫性や積み重ねのある取組になっていた。えがお学級では、自立活動を行うことで、こどもたちと課題を確認し、成果と反省を行うことができた。週に1回考え抜く授業の設定ができなかったというクラスもあった。	A- 考え抜く力が育っているか、児童が主体性に取り組んでいたか、は見極めが難しく、さらに児童による格差が見られるので、さらなる検討と工夫が必要と思われる。	
		○各教員が指導力を高めることが、こどもの学力向上に寄与するという考えから、得意分野を各教員がさらに伸ばすとともに、お互いが聞き合い、困り感を伝え合えるような補完関係を構築する。	・各教員による得意分野の研究実績 ・月1回以上は他教員からの刺激で改善しようとする	改善した授業の回数 こどもの様子 本プラン状況確認時	適宜 9・1月	A 研究授業・道徳公開授業・SU研(体育・国語・学級経営・SSW不登校事例研修・家庭科防災バック・プログラミング)の研修を実施。放課後に授業での困り感を話し合ったり、アドバイスし合ったりしている。	A 研究授業や討議会も良い機会になっている。また、学年で授業づくりや子ども理解についての話し合いを行っている姿がある。支援学級や通常学級担任との連携もたくさん取れた。スキルアップ研修等があり先生の得意分野がわかり、相談しやすい環境にできた。月1回以上は授業を見に来てもらっているが、見に行くことができなかった職員も複数いる。授業を見合える環境づくりは課題である。	A- 先生方が授業を相互に見学して指導力を高める取り組みは良かったが、働き方改革による時短や引越し作業、先生方の個人的事情があり限界を感じた。人員不足の影響は児童アンケート(6)でも見て取れる。それでも大過なくなく過ごせたのは、先生方の多大な努力の成果と評価できる。良い授業はリモートやビデオで共有するなどの工夫に期待したい。	
	学習習慣を定着させる一方策として、家庭での習慣づくりを行い、自ら学ぶ子の育成をめざす。	○毎日の宿題はもとより、読書を含めた家庭学習の定着を確かなものとするため、自主学習ノートの活用について研究を深める。 ○自主学習の必要性について自主学習コンテスト等によるこどもと保護者の意識を引き続き高める。	・毎日の宿題について教員が確認し、100%提出をめざす。 ・自主学習について、自らが計画を立て学習していけるようなこどもの育成をめざす ・学校、学年、クラスでの自主学習が高まるような取組を継続推進する	自主学習ノートの内容 本プラン状況確認時	適宜 9・1月	B 自主学習のメニュー紹介や自主学習を見合う機会の工夫(掲示等)に取り組んでいる。自主学習コンテストを続けてきているので、自主学習のレベルがどんどん上がっている。毎日の宿題の提出率は100%達成をめざしている(朝忘れてもその日の内に提出)。	A 自主学習コンテストがあることで、やる気につながる児童や、いろんな学習の仕方を知る児童が増えている。学習内容に困る児童がまだいると思うので、引き続き取り組みを続けていくと効果的だと考える。児童に寄り添った宿題の出し方・量等の検討が必要。	A 自主学習ノート、コンテストの取り組みが定着し、家庭学習の提出100%をめざしているのは良いが実態が気にかかる。またコンテストでは一部で同じ児童が目立つなど、学習習慣、意欲での格差が懸念される。読書への関心、意識の低下が児童保護者両者に見受けられる。読解力向上のために朝読の復活や本の紹介など読書への取り組みに期待したい。	

豊かな心	人権教育・生徒指導	いじめのない「笑顔あふれる学校」をめざし、他者理解を進めながら自尊感情を高める取組を行うことで、お互いに認め合える人間関係作りを構築する。そのために、道徳も含めて、障害者理解教育等を中心とした人権教育を推進するとともに、子ども自らが考え実現する取組を効果的に行う。	<ul style="list-style-type: none"> ●特別活動はもとより授業の場で、「居場所と出番」を確保する。 ○他者理解を進めながら自尊感情を高める取組を推進し、居心地のよい集団づくりを進める。いじめの早期発見と解決に向けて、情報モラル教育を推進し組織的に取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業を含めての「居場所と出番」の確保 ・いじめを含めた問題行動の未然防止の取組の推進 ・発覚した場合、早期解決に向けた対策会議の設置と解消に向けての取組 ・情報モラル教育推進の一側面として、タブレットの使用時の適切な指導 	各クラス等の取組 児童理解シート 職員会議 タブレット使用の実態 本プラン状況確認時	適宜 毎月 9・1月	B	日々「居場所と出番」を考えて特別活動や授業の中で実践がされている。不登校ケース会議、いじめ防止対策基本方針の改定、いじめ未然防止研修を実施。	A	教師が子どもをより細かに見取っていくことで、どんな子どもたちでも活躍できる場をつくることできた。不登校傾向や気になる児童のケース会議を行うことで、具体的手立てまで話し合い、実践に生かされた。いじめ防止対策基本方針の年間計画を学期に一度見直し、実践をもとに改定できた。休憩時間のタブレット使用について、問題意識をもち4月の当初に打ち合わせでき、明らかにゲームなどの行動がなくなった。情報モラル教育は引き続き行う。	A	居場所と出番の確保、特に目立たない児童へのフォローが重要で、必ず一度は意見を発表する機会を設けているのは良い。特別支援教育では通級教室との連携で、安定した学習生活環境が確保され、「えがお体育」など児童の交流と成長を促す工夫も評価できる。支援体制は概ね機能しており、安心できる居場所づくりに大きく寄与している。大きないじめの事案も聞かれない。
		○浜寺っ子の決まり等をつくるための子ども自らが参画した仕組みづくり ○挨拶のあり方や学校への持ち物について、みんなが楽しく過ごせるルールなどについて子ども自らが参画し、その意味を理解するとともに、ルールを守ろうとする規範意識を醸成させる。	<ul style="list-style-type: none"> ・児童会や学年、学級の中で、ルールづくりに関する話し合いを行い、実践した回数及びその効果 	本プラン状況確認時 実施後のこどもの実態 観察	適宜 9・1月	A	高学年が児童会や委員会できめたルールを意識して、学校生活を送っている児童が多い。自分たちできめたクラスのルールも守ることができている。決まりに関するアンケートをもとに児童会を中心に現在は体育館シューズの話を進めている。	A	ルールメイキング委員会が良い校則のものさしを作ることができ、上靴と体育館シューズのルールを作ることができ、こどもが学校のルールづくりに参画できた。こどもだけでなく、先生方や保護者、地域の人たちも「ルール」について話し合い、考える機会が増え、意識が高まっている様子。新校舎のルールを考えるのも一つ。また、今あるルール・変えたルールをどうやって守らせていくかも大切である。挨拶については道徳で考える時間をもったが進んでできるようにするため、取組を工夫していく必要がある。「あいさつビンゴ」「できている児童を褒める」「挨拶の必要性を伝える」等	A	昨年に引き続き「ルールメイキング」委員会で、児童自らが先生や地域の大人の意見を聞いて、自分たちのルールを考えたのは良かった。委員以外の児童にも一定の意識向上に繋がっている。ただ児童アンケートで挨拶や廊下歩行のポイントが低いので、その重要性和実施する理由を考えさせることで意識向上に繋がると思われる。	
		○お互いを認め合える集団づくり 特別活動や生活科・総合的な学習の時間等活動や道徳をとおしてより良い集団づくりを行う。 (具体的な取組) ・はまでらっ子グループ ・異学年交流 ・障害者理解教育 ・国際理解教育 ・平和教育 ・道徳等	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもが企画したはまでらっ子グループの実施回数やその内容 ・各学年における異学年交流の計画的な実施 ・障害者理解教育の推進 ・国際理解教育の推進 ・平和教育の推進 ・考え議論する道徳教育の推進 	本プラン状況確認時 実施後のこどもの実態 観察	適宜 9・1月	A	えがお学級は1年生と土曜参観にて国際理解教育の取組を実施。支援学級担任による障害理解の授業(1・3・5年実施済み)や道徳の研究授業(6年)を実施。支援学級のこどもの通常学級での居場所づくりを引き続き行う。はまGは6年生が計画、リーダーとしてがんばる姿やみんなで楽しむ姿が見られた。校外学習や学校探検(1・2年)、体力テスト・清掃(高学年と低学年)などでも異学年が交流している。平和教育は映像や絵本等を見ながら戦争・平和について考えた。	A	異学年交流は活発に行われた。こどもたちの実態から、道徳の研修をおこなったり、障害者理解教育を行ったりすることで、よりこどもたちどうしの理解につながった。保育園・幼稚園交流、ミニ・ハギハッキョ、もちあじやぼかぼかの実など様々な取組ができ、互いを認め合える集団づくりにつながった。デフリンピック選手の出前授業では手話に興味をもった児童がいた。浜Gは6年生のモチベーションになっており、責任感をもって取り組んでいる様子が見られる。	A	浜寺っ子グループ活動は、高学年も低学年もいきいきと楽しそうに活動している様子が窺えた。特に6年生は学校のリーダーとしての自信や低学年児童への思いやりに繋がりが、5年生は時期リーダーとしての自覚につながる取り組みになっていると思われる。	

健康な身体づくり 健やかな体	自己の健康に関心をもち運動に親しむこどもを育成する。	●運動に親しむために授業において個に応じた場の設定を工夫し、体力づくりを推進する。	・体育実技研修を行うなどして、日々の体育の授業における体力向上の取組の研究と充実	本プラン進捗状況時 ・保体給委員会での実践の持ち寄りとその公開の内容及び回数	9・1月	B	体育実技研修（授業の基礎基本・水泳）により、授業の進め方や個に応じた場づくり、整列のさせ方等を学ぶことで、体育の授業のイメージが持ちやすくなった。また、5・6年生は学校独自に体育を教科担任制で授業を行うことで教材研究の確保に努めた。	A	体育実技研修は、授業力向上だけでなく、運動を通して話しやすい雰囲気にもなるので、職員間の親密にもつながった。技のコツを知るなど体育の授業づくりでの困り感をもとに研修を行うのもよい。体育に対する先生方の指導の在り方が以前より前のめりになった。高学年は教科担任制で、より専門的に進められた。えがお体育を楽しみにする子どもたちが増えている。	A-	校舎建替え工事で運動環境は依然厳しく、第2グラウンド使用も制約され、授業時間確保に課題があった。一方で体育スタンダードや大縄跳び、外部人材の支援による水泳指導など先生方の体育科への関心の高さが窺える。体育参観などでの連携の良さや教科担任制もあって、子どもたちも意欲的に取り組んでいる様子で、今後も教員間の情報共有とさらなる授業改善に期待したい。
		○体育的行事を教員がこどもと共にイベント化することにより、こども自身が体力向上に対する意識と技能を高める。	・浜リンピックや縄跳び大会の実施状況	実施回数 本プラン進捗状況時	9・1月	A	浜リンピック2年目で、去年の記録をより意識して前向きに取り組む姿が見られた。2学期以降、縄跳び大会など新たなイベントも計画予定。意識や技能向上に継ぎつめて継続的に取組を工夫する。	A	浜リンピックや大縄大会など楽しみ企画を実施できた。体育参観で、こども主体でダンスを考えたり、水泳のお楽しみ会をこどもと企画したりできた。イベント化だけでは体力は向上しないので、日ごろの生活に対してや体育での声かけを大切にすることで、運動の習慣化を図りたい。	A	体育科の学習やその他の運動が制限されている環境で、児童の意識を低下させないよう、浜リンピックなどイベント化する工夫とその成果が見受けられた。
		○体育委員会などの場において、年間を通じてこども自ら体力向上に向けた取組を考え、体力づくりの大切さを意識できるようにする。	・体育委員会や各クラス等で実施した取組の実施回数	実施回数 本プラン進捗状況時	9・1月	B	休み時間は学年でまわってくる体育館での遊びを楽しみにしている。体を動かす機会が少ないためか、体力が持続しない児童が多く、けがも目立つ。休み時間に体育館にて体育委員会と各クラス全体で体力向上の遊び「こそこそおにご」「玉ラトーン」を行った。	B	休み時間の体育館開放を楽しみにしている児童が多かった。学期ごとに体育委員会の取組ができた。体力づくりの大切さを考えるのは、すべての子どもが必要であり、体育委員が中心となりつつ、クラス単位でも、体力づくりの取組を話し合い、進めていきたい。運動場が完成したらさらに充実できるよう準備を進めていきたい。	B	児童自らが体力向上を意識し、考え行動する機会を持つ取り組みをしたが、現実的に学校や帰宅後も場所や時間が限られ、その場限りとなる様子が窺えた。保護者アンケート(21)(22)にあるように、外遊びよりも家でゲームなどが増加傾向にある。
		○本校における保健課題に応じた保健指導を計画的に行う。 ・食育・睡眠教育の推進	検診時の保健指導・保健委員による啓発	実施回数 本プラン進捗状況時	9・1月	A	食育や歯の衛生指導など、子どもに分かりやすく、また計画的に行われている。校長による「早寝・早起き・朝ごはん」の啓発を朝礼時や学校通信で実施。	A	食育は訪問栄養教諭による授業を実施した。「命の授業」「二次性徴」「薬物乱用」の出前授業を実施した。検診時に子どもたちの発達段階に合わせた指導を行ったり、睡眠について授業を行ったりした。保護者には、その様子をHPで発信したり、睡眠の大切さについてテトルで配信し、啓発できた。また、3学期、保健委員会のこどもたちによる紙芝居等も全校生に行った。朝礼で「はやね・はやおき・あさごはん」をテーマに話をし、意識する機会を増やした。しかしながら寝不足気味の児童が見受けられる。個人への指導（睡眠大事等、早く寝る等）を続けていくとともに、参観やオープンスクールの時間などを使って、睡眠について保護者の啓発をするなど取組を継続する。	A	養護教諭を中心に発達段階に応じた保健、食育指導が年間を通じて体系的に実施されている。紙芝居や掲示物など工夫された教材による理解しやすい指導で、健康意識の向上に繋がった。また児童、保護者、教職員間の調整役として、問題の未然防止にも取り組まれた。口腔衛生の取り組みが外部表彰を受けた点も高く評価できる。「早寝 早起き 朝ごはん」は日常生活の基本であり必要であるが、課題が多いので引き続きの指導に期待したい。

校長より（年度末）
○学力については、今年度の4年から6年学力調査では、5年算数以外において、全国や府の平均正答率を上回る結果となった。学力の二極化においても改善傾向が見られたが、資料を比較しながら考える等課題点については、新年度に全職員で再度共有したい。また、考え抜く力の育成に向け、「家庭学習」「授業」を通し継続して基礎基本の定着を図るとともに、課題設定のあり方など自ら学びを進めるという視点ももちながら、取組を進めたい。
○各項目の目標達成に向けて様々な取組を進めてきたが、アンケートの結果を踏まえると「読書・運動習慣」「早寝・早起き（睡眠）」等においては、スマートフォン等でのゲーム・SNS等の利用時間の長さとの関連が考えられることから、家庭・地域との連携を図りながら、情報モラル教育等、学校・学年での取組をさらに工夫する必要があると考える。
○「あいさつ・廊下歩行」については生活目標や道徳の授業との関連も図りながら、こどもが主体的に考えられるようにしたい。
○評価項目については、教育アンケートの項目をリンクするなどより評価しやすくなるよう改善を図るとともに、判断基準・評価の方法を意識した取組・評価・改善を行う。

学校関係者評価者の皆様には一年間、授業の観察・授業補助等も行っていただきながら、丁寧に評価いただきましたことに深く感謝申し上げます。いただいた評価をもとに、学校力向上に向け、次年度、具体的な取組の改善案を検討してまいります。また、保護者・学校協議員のみなさまには、本校教育活動にご理解・ご協力いただきまして誠にありがとうございました。

学校関係者評価者から（年度末）
【学校教育総評】校舎改築、感染症、教員の欠員など悪条件が重なる状況で、児童が大きなトラブルなく過ごせたのは、校長先生のリーダーシップと先生方のチーム力の成果である。昨年度までの「居場所と出番」「いきいきとした学校 子どもも教職員も」に加え、生活の基本である「早寝早起き朝ご飯」が徹底されたことも児童の安定に繋がった要因と思われる。
【学校力向上プランの評価項目について】自己評価の評点ABの見極めが難しく、関係者評価ではあえて「A-」を設けた。さらに可能な範囲で各評価項目と教育アンケートの項目をリンクさせて頂けるとありがたい。
【学校教育環境について】校舎建替え工事では仮設校舎での学習や先生方の業務負担増加など、児童の学習に相当な悪影響があった。また先生方の若返りによる産休育休の発生は十分予測され、事前に対策を取ることは堺市として進めている働き方改革の一部とも考えられる。と同時に当然児童にも大きなリスクがあったと思われる。